
目隠し 前編

エルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

田隠し 前編

【Zマーク】

N4490A

【作者名】

エルル

【あらすじ】

少年はごく普通な中学3年生。いつだって、仮面をかぶって生きている、そんな人間。そんな少年の机に、ある日一枚の紙切れが…。その紙切れが、少年の心の転機となる。

さまよう人よ、何を迷う
道は一本しかないだろう?
何故手探りで進むのだ
真っ直ぐに…ふらつくな
前を見ろ
光が見えるだろ??

「…何だこりゃ」

家に帰つて机を見れば紙切れが一枚。
俺の家族に、こんなことする奴、いたつけ?

「お前は神か」

はあ、とため息をつき、紙の上に鞄をドサ、と置いた。
何が言いたいのか、さっぱり分からぬ。
こういうのは見なかつたことにするに限る。
俺は見なかつた。
この紙切れを見なかつた。

俺は中学3年生の城崎千晴。
成績普通、運動普通。

特に何も突出していない、平凡な中学生。
いつもいつも、学校に通つて、友達と笑い、楽しんでるよいな中学生。

笑い、楽しんでるよいな中学生。
よいな。

あくまでそれは建前の自分。
グループも、クラスで一番強いといひこいて。
教師の悪口、いじめられてる野子への暴言。
つまらないことで笑い、ふざけ合ひを楽しんで見せていく。
る。

そこつらに嫌われると、やばいから。
そこにないと、心配で心配で。

結構こうこう風に思つてゐる奴つてこると思つたが、俺もその一人で。
本当はしたくないことばかりを、強制させられて生きてこる。

これが俺。

* * *

夕食も食べ終わり、風呂にも入つた。
牛乳も飲んで、歯磨きもした。
見たいドラマも、もう見終わつたし、後は寝るだけ。
……間違い、明日の準備が終われば寝るだけ。

「あーあ、明日古典あんのかよ……」

べじゅべじゅと、まだ乾き切れていない髪をかく。

「予習しねえと」

椅子を引き、机に無造作に置かれた鞄をビクル。

「……」

どかしたそこには、紙切れ。

そういうやこの鞄、無造作に置いたんじゃなかつたつけ。意図的に…この紙切れを隠すために置いたんだつけ。本当に、見なかつたことになつてたよ…。

「はあ」

鞄を床に落とし、椅子に座つて紙を再度見る。

「見なかつたことにしたけど…」

捨てなかつたのは、きっと、また見たかつたから。

ちやんと、内容を考えたかつたから。

この紙に書かれた言葉は、なんだか、とても重要な言葉のよつた気がする。

誰が置いたか分からねえけど、切に、何か訴えているような、そんな気が。

俺はその紙に書かれた言葉を声に出して読んでみた。

「 もう一人よ、何を迷う。」

道は一本しかないだろ？

何故手探りで進むのだ。

真つ直ぐに…ふらつくな。

前を見る。

光が見えるだろ？…か

紙を、何度も何度も黙読する。

何だか分からぬけど、俺の机にあつたってことは、俺に言つてゐることで…。

つまり、俺に指摘しているってことか？

「もういいや

結局俺にはその紙の意図することが分からず、丸めて「ミミ箱に投げ入れた。

そして、俺は古典の予習をし始めた。

さまよう人よ、何を迷う

道は一本しかないだろ？

何故手探りで進むのだ

真つ直ぐに…ふらつくな

前を見る

光が見えるだろ？

*

「う…」

無重力。

周りは真っ白で、自分がここに寝ているのが、本当に不思議。

「…夢」

ここは夢だ。

夢を自覚できるって、初めての体験。

『目覚めたか、人間』

「…?」

俺は後ろを振り返る。

そこにいたのは、俺と同じ背丈ぐらいの何か。

白い布で全身すっぽり覆われていて、何なのか分からぬが、これが声の主。

俺は訝りながら、そいつに声をかけた。

「お前…何?」

『すまんがそれは、今は言えぬ。

ただ、お前に見せたいものがある』

自分勝手な白い布。

白い布は手らしきものを出し、空間を引っ張った。

そこに現れたのは、『』こと対照的な黒い空間。中にま、やっぱりそいつと同じような白い布の生物。

『これは、お前達多くの人間が歩いている場所だ』

「これが？」

ただ、暗いだけの空間が？

『そうだ』

白い布は『』へと頷く。

『そして、『』がお前だ』

そいつは黒い空間の白い布を『』取る。そこ『』るの『』。

「俺……！」

まぎれもなく、俺と同じ顔かたちをした……『』。

『進め』

白い布は、『俺』に命令する。

俺はその光景を見て愕然とした。

『俺』は確かに進み出した。

しかし。

「……なんだよ『』……」

『俺』はさきより見回して、おどおどして、足元を確認して歩く。

前に手を出して手探りしながら。
おまづかない足で、ふらふら倒れそうになりながら、進む。

『これがお前の本当の姿だ』

白い布は続ける。

『お前には見えるか？

お前が歩いている道が。

お前の道が』

俺は『俺』の足元を見る。

「見えない……いや、ない？

……道が、ない？」

『俺』の歩いているところに道はなかった。
道がどんなものか分からなかつたが、直感的に、道と呼ばれるものがそこにはないのが分かつた。

『分かるか。

お前の道はあれだ』

白い布が、指うじきもので、『俺』の右隣を差す。

「あ……」

確かに、そこには俺が見ても分かるよつた、道があった。
周りがそこだけほんのり明るくて、温かみさえ持つていそうな、そ
んな道。

「…かなり逸れてるじゃ…ないか

『俺』は自分の道の5メートルぐら^一離れたところをお^二歩^三歩いていた。

『お前の道はそこなのだよ。道は一本しかない。しかし。

お前は道なき道を歩んでいる。足下に道はない。

お前が歩いているのは闇だ』

「闇…」

『ぐくつ、とつぱを飲む。

『俺』が歩いている所は闇。道から逸れて、歩いている場所は闇…。俺は白い布に尋ねる。

「闇…って歩けるのか?」

=====

変なところで切つてすみません(汗

前編・後編です。

なんだかよくわからないかもしませんが、お付き合いくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490a/>

目隠し 前編

2010年10月11日03時59分発行